



# 聖夜の逢瀬

永井義孝

## 目次

テスト明けの逢瀬	… <a href="#"><u>3</u></a>
聖夜の逢瀬	… <a href="#"><u>30</u></a>

## テスト明けの逢瀬

窓越しに冷気が肌を撫でる。暖房が効いているとはいえ、これだから窓際の席は。カーディガンの中で鳥肌を立てる腕を擦りながら、ぼんやりと担任の話を聞き流す。

今日は曇りだから余計に寒いのか。午後に少し過ぎたばかりだというのに、薄暗い空が校庭を覆っていた。

「それじゃあ、寄り道せず帰るように」

担任が日直の名前を呼ぶと、小さな号令がかかる。直後、三日間の期末考査で溜まった鬱憤を晴らす怒号のような「ありがとうございました！」が教室に響いた。

少しずつざわめきだした教室を颯爽と出て行く金髪を目で追う。学校指定外の黒くてお洒落なコートを羽織りながら、すたすた廊下に行ってしまった。

相変わらず下校が早い。追いつかなければ、と席を立ったところで、後ろからガッと肩を組まれてしまう。

「わっ」

「セキ〜、打ち上げにファミレス寄らね？」

寄り道しないように言われたそばから、これである。とはいえ僕も寄り道の予定があるから、人のことを言っている場合じゃない。

声をかけてくれた松本には軽く手を合わせて「ごめん」と謝る。

「先約があって……」

松本は目を細めると、ぼそりと「菖蒲？」と聞いてきた。

「よくわかったね」

「お前ら仲良いよなあ」

空席になった彩芽の席に視線が向く。

「俺、正直まだ怖えもん、アイツのこと」

「あははっ、まあ僕は彩芽と付き合い長いからね」

菖蒲彩芽といえば、校内きってのヤンキー、もとい暴力男である。柄の悪い連中とつるむことこそ無い一匹狼ではあるが、どこかしこで暴力沙汰を起こしては謹慎を食らっていた。

校内で先輩を病院送りにしてしまったことだってある。怖がられているのは、当然と言えば当然だ。

僕にとっては可愛い幼なじみで恋人なのだけれど。

「じゃ、ごめん！ 僕彩芽を追いかけるから行くね、またね～！」

「おー、また行こうぜ」

彩芽ってやつは、こういうときでも容赦なく僕を置いて行くタイプだ。教室を飛び出し、同級生達を避けながら階段を駆け降りる。

幸いまだ、薄い金色頭は靴箱でスニーカーに履き替えているところだった。

「彩芽！」

教室から靴箱までの道中で巻いたのであろう、シックな紺のマフラーがよく似合っている。下ろした長髪の毛先が、マフラーの下に入り込んでもふりと膨らみを作っていた。白い鼻先も、外の寒さにあてられ赤らんでいる。

彩芽はスニーカーに足を突っ込みながら、緩慢な動きで背筋を伸ばし、僕を呼んだ。

「セキ」

取っ払ってしまえば良かった。しかし先に彩芽をイかせてしまいたい。はやく、僕の手で蕩ける彩芽を堪能したくて仕方がない。

指を揃えてクリトリスに添えた。これからすることを分からせるように、三本指をゆっくり左右に動かし、クリトリスを撫でる。

「あ、あっ……、っ」

彩芽は薄く目を開けて、焦れったそうに僕を見上げた。

「足、もっと開ける？」

返事はない。しかしおずおずと、大きく足が開かれていく。僕の手動きに合わせて腰がゆるゆる前後した。たまに、気持ちいい場所を擦りつけてくるような動きをするから、これでもかと加虐心を煽られる。

「は、あ、あっ、……んっ、んぐ……っ」

「イカせるね」

「……………、ん」

この瞬間が一等たまらない。

誰より気高くて美しい男が、菖蒲彩芽が、僕の手で快楽を得ることを望んでいる。それを隠しもしないでいてくれる。衝動をぶつけるみたいに、やわい胸に歯を立てた。

「い、ツア！」

それから、激しく、大きなストロークでクリトリスを撚っていく。

「っう、あ、あっ、は、ッ、あ、ん、ンッ、あ、ああッ！」  
「ん、すごい音、聞こえる？ くちゅくちゅ言ってるのっ」  
「あッ、う、うるせ……、ふ、んうっ、あ、あ、あっ！」

暑くて、のぼせそうだ。

追い詰められていく彩芽の嬌声にあわせて、指の動きをさらに激しくしていく。上擦って高く掠れていく声が艶やかに響いた。

「彩芽、っ、いくときなんて言うんだっけ？」

「は、あ、あっ、あ、いっ、いく、っいく、いくっ！」

かくんっ、と腰を突き上げられた。

「~~~~ッ！」

絶頂の直後、脱力していきながらも、体は余韻で快樂に揺れ続けている。肩で息をして、離れようとする僕の手を太ももが挟んだ。無意識だったのか、蕩けた瞳で自分の下半身を見て、ゆるく足を開いて僕の手を解放する。

「すごい、びちょびちょ」

「……っ見せんな」

上下する胸に愛液塗れの指を擦りつける。キッと睨み付けられた。

彩芽も僕も、とっくに汗だくだ。さすがに脱ぎたい。というか、素肌で彩芽を感じたい。

マフラーを外して、コートを脱ぐ。それだけでさっぱりして、頭の中もすうと気持ちよく冷えていく心地になった。学ランも脱いで、シャツも何もかも脱ぎ捨ててしまえば、いっそ寒さも覚える。そういえば、暖房はつけていたのだろうか。

彩芽は寝転んだまま、なにが楽しいのか、僕のストリップをぼんやり眺めていた。

「暖房のリモコンどこ？」



「……わかんね、どっか」

汗まみれの体が冷氣に晒されて鳥肌が立つ。

「はは、勃ってる」

「勃つよそりゃ」

勃起した下半身を揺らしながら、全裸でうろうろリモコンを探す姿はさぞマヌケだろう。彩芽はようやくマフラーとコートを外していた。

「あった」

部屋の隅に捨てられていたリモコンを拾い、暖房をつける。それから緩慢な手つきでボタンを外している彩芽に手を伸ばす。手早く外して脱がしてやれば、耳元で甘く「せっかちがよ」と笑われた。

二人揃って一糸まとわぬ姿になって、手を広げて抱き合う。湿った肌が吸い付きあって気持ちいい。彩芽の手が腰を撫でてくれて、ぞくりと背中をなにかが走る。胸を這わせあって、彩芽の肩甲骨を撫でた。

唇を押しつけ合う。柔らかい唇を堪能しあうように、角度を変えながら口先だけで食みあった。

彩芽の指先がいたずらに背骨をすう、と辿る。驚いて肩を跳ねさせると、「かわいいじゃん」と甘ったるく囁かれた。

小っ恥ずかしさに襲われる。そんなこと言えなくしてやるべく、今度は大口を開けて彩芽の唇を覆う。逃げないよう後頭部に手のひらを添えて、口腔へ舌を押し込んだ。

「おお、っ、んっ」

歯茎と歯の間を舌先でくすぐる。絡まってこようとする彩芽の舌はあえて相手しないで、ひたすらに上顎や内頬を撫で回した。

「んっ……、ふ、……っ」

涎が垂れ落ちていくのも気にしないで、ひたすら貪る。そのまま再び彩芽を布団へ押し倒した。はらりと金色の長髪が散る、見慣れたはずの光景にすら、簡単にそそられてしまっていた。

濡れそぼる秘部へ、また手を伸ばす。今度は蜜壺へ中指を埋めた。何度も僕を受け入れてくれたソコは、簡単に僕を受け入れ、締め付け、悦ばせる。

「んん……ッ」

彩芽は両手をあげて頭の下枕を掴んだ。惜しみなく晒される体は、滲んだ汗を照明に艶めかされている。足は大きく開かれたまま、僕の体に邪魔され閉じることを許されない。恥肉の筋のあわいから、ちょこりと顔を覗かせるクリトリスが僕を誘う。

ナカに埋める指を増やししながら、もう片手の親指でクリトリスを撫でた。

「ンうッ」

「彩芽、見ててね」

「は……、な、なにを……」

「彩芽のきもちいトコがいっぱいいじめられるとこ♡」

「いーって、そういうの……」

彩芽は目の前の光景から逃げるように瞼を閉じる。

それならと僕は、クリトリスの根元を親指で撫でながら、膣に埋めた二本指をわずかに曲げた。

「っ……！」

「別に僕は、このままでも楽しいけど」

「趣味わりいってえ……」

「今に始まったことじゃないでしょ」

クリトリスの上側を押し上げる。皮を剥かれ、剥き出しになった蕾が可愛く覗いた。焦れったように体が揺れ、愛液がとろとろこぼれ落ちて、布団を汚していく。

「彩芽」

「……っ、くそ……」

彩芽は顔を、僕のほうへそろそろと向けた。ナカがきゅうと締まって、急かしてくれているみたいだ。

「目、そらしちゃ駄目だからね」

膣に埋める指を三本に増やす。それから、クリトリスの表面を親指で撫でつける。これから与えられる快樂に期待したのか、腹筋がぴくりと動いた。

「ああ……っ、んっ、んう……っ」

「こら。目、閉じないの」

「あ、……は、っ、んっ、ふうう……………」

滲んだ瞳が、ジッと彩芽自身の下腹部に向かっている。

見せつけるようにクリトリスを指で摘まんで引っ張った。

「っぐあ！」

こりこりと優しくこねくり回しながら、ナカに埋めた指で腹側をすりすりと撫でる。手触りが少しだけ違う場所を数秒軽く刺激しただけで、とぷりと愛液が零れだした。

「はっ、あ、……あ、……っ、ん、う、ああっ」

「はは、腰揺れてるのわかる？ きもちいね、彩芽」

「あっぐ、う、るさい……っ、ん、は、ああ、あ、ぐぐ、んっ、ああ……ッ」

「自分でひっぱってごらん」

「は、ア……!?」

「できるよね、彩芽」

「……っ」

黒目が右往左往する。責める手付きを緩めれば、寂しそうに眉尻が下がった。視線がかち合ったときだけ、強くクリトリスを叩いてやる。逃げたらやめて、こちらを見たら刺激して。

「イきたいでしょ」

形良く出っ張った喉仏が上下したのを見逃さない。  
おずおず右手が伸びてきて、恥肉をふにと押し上げた。

「いいこ」

親指でクリトリスを根元から押しつぶす。

「んうぐうッ！」

それから、埋めた三本指全体で激しくナカを揺さぶり始めた。

「～～ッ！ は、あッ、ああ、……っ！ ん、ふ、うう…  
…っ、あ、あっあっ、あっ、んっ！」

白い肌に朱色が広がっていく。愛液が零れるごとに親指で掬って、わざと水音を大きく立てた。柔らかい膣壁に指を締め付けられる。ここに自分のモノをぶち込むことを想像して、気がはやっていく。彩芽をいじっているだけなのに自分の息が荒くなっていった。

「ああ……！ ん、うう……！ ふっ、ぐう～ッ！ ん、

あ、あ、ああ、あ、あ、ああっ、ああっ！」

嬌声が大きくなっていく。恥肉を押さえていた彩芽の手は、とくにソコにあるだけでなんの意味もなしていなかった。黒目を濡らし、切なげに僕を見つめてくる。

イキたいから、僕から絶頂を与えられたいから、健気に僕を見ている。脳天をまるごと揺さぶられるみたいな高揚を、快樂に跳ねる彩芽の肢体にぶつけた。体をくねらせながら、筋肉の筋が妖艷な曲線を描いて僕を誘った。

「はっ、あ、あ、あ、イク、セキっ、イク、イクっ」

「うん……っ」

足が布団を蹴る。かと思えば、布団を強く踏みしめるようにぐっと力を入れるから、下腹部を僕に差し出すみたいに突き上げられる体勢になっていた。ねだられていると勘違いしたことにして、洪水みたいに愛液を垂れ流す場所を容赦なく責め続ける。クリトリスもぷくりと膨らんで、標的になりたがっているみたいだ。

「……っ、イッて」

「イク、う、あ、〜〜〜ああッ！」

膣がきゅうと締まった。柔かった場所がピクピク痙攣している。果てたのが分かっていながら、彩芽を責め立てる指は止めなかった。

「あ、あ、あ、え？ あっ、ああッ！」

先ほどまでよりもっと激しくクリトリスを撚る。Gスポットを深いところから揺さぶっていく。

「～～イッでる!! イぐ、あ、あっあっあっあっアッ、ふッ、うう、ッお！」

必死な手が、僕の手を自分から離してやろうと懸命に伸びてくる。爪が手の甲を引っ搔いてくるのも、快楽に思えた。彩芽の言うとおりにとはなってあげられない。責める手の激しさも緩めてやらない。

「……ツイ、イぐっ、いッでる、あ、あ、あ、くるっ、でる、でちゃ、ッ、あ、あああッ!!」

悲鳴じみた嬌声があがった。ぷしゅッと噴き出た潮が僕の腹にかかる。